

たづね

あはれはかみひのあまむ

じつちれんははのちまねやほまれまふ
 まろくしきくさいまろくろく
 ちろくしきくさいまろくろく
 まろくしきくさいまろくろく
 ちろくしきくさいまろくろく
 まろくしきくさいまろくろく
 ちろくしきくさいまろくろく
 まろくしきくさいまろくろく
 ちろくしきくさいまろくろく

高野切 (傳貫之筆)

目次

| | | | |
|--------|----|-------|-----|
| 解題 | 四 | 恋歌一 | 一六七 |
| 古今和歌集序 | 九 | 恋歌二 | 一七四 |
| 春歌上 | 三 | 恋歌三 | 一七九 |
| 春歌下 | 七 | 恋歌四 | 一八四 |
| 夏歌 | 一〇 | 恋歌五 | 一九〇 |
| 秋歌上 | 一三 | 哀傷歌 | 一九七 |
| 秋歌下 | 一七 | 雜歌上 | 二〇五 |
| 冬歌 | 二〇 | 雜歌下 | 二一三 |
| 賀歌 | 二四 | 雜・休歌 | 二二八 |
| 離別歌 | 二八 | 大歌所御歌 | 二三三 |
| 羈旅歌 | 三五 | 索引 | 三〇〇 |
| 物名 | 三三 | | |

古今和歌集詳解 中村秋香
古今和歌集評釈 金子元臣
古今和歌集評釈 窪田空穂
等がすぐれている。なお、註釈書ではないが、久曾神昇氏の古今和歌集綜覧は、古今集の代表的諸本を古筆切に至るまで蒐集対照したもので、研究家必見の書である。

古今和歌集序

やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、いひいだせるなり。花になく鶯、水に住むかはづの聲を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。

〔通釈〕 わが国の歌というものは、人間の心情をもととして、それがさまざまの言葉として表現されたものである。この現世に住んでいる人は、あれこれと事件の多いものであるから、心に感ずることも多いが、そういう心の動きを、見るもの聞くものに託して言い表わしたものである。いや、それは人間だけのことではない、春の花に啼く鶯、秋の水に住んでいる河鹿の声を聞くと、これも物に触れては心を動かして啼いているのであって、一切の生命あるもの、どれ一つとして歌をよまないものがあるうか。

〔語釈〕 ○この節は冒頭として歌の本質を説いている。○やまと歌―和歌。「から歌」に対したものの。○人の心を種として―「種」はもと、根本の意。下の「言の葉」に対して。人の心情をもととして。○よろづの言の葉―「言の葉」は言葉。○ことわざ―事件。○心に思ふこと―さまざまな事件の起るにつけてあれこれと心に